

第1章

動詞と文型・節

この章では、まず「動詞」に始まり、時制、文型、節といった、英語の文の骨格にあたる事項に関する例外を扱います。

「動詞」というと、まず英語を学び始めた段階で「三単現のS」という規則を習いますが、主語が一人称(I)でも動詞に-sがつく場合があることをご存知ですか？(→p.012) また、動詞の時制に関連する項目として、過去形が現在の気持ちを表すケース(→p.016)や、willが使っているのに過去の意味を表すケース(→p.030)などをとりあげています。

さらに、文型や節という、英語の構文に関する文法事項では、第2文型のSとCが=(イコール)関係ではない例(→p.052)や、従属接続詞が形容詞節をまとめる例(→p.058)などを扱います。

1-1 says I

—— 主語が3人称でなくても動詞にsがつく？

1 三単現のS

英語を学び始めておそらくいちばん最初に習う英文法の規則が「三単現のS」ではないでしょうか。主語が三人称で単数扱いの語のとき、現在形の動詞に-sがつくという規則です。

(1) She **says** she loves you. (彼女は君が好きだと言っている)

ご存知のとおり、英語の動詞は以下のように活用[変化]しますが、語尾に-sがつくのは「現在形」だけ、つまり上に述べた三単現のSの場合だけなのが原則です。

原形	現在形	過去形	過去分詞形	現在分詞形
take	take(s)	took	taken	taking
love	love(s)	loved	loved	loving

2 says I や says you もある！

ところが、主語が三人称単数ではないのに、動詞に-sがつく超特異なケースがあります。以下は私の手元にある *Verbs and Tenses* という文法書にある記述です。日本語訳を添えておきます。

In very informal English, when the verb **say** is used in the simple present tense to refer to the past, it may have an -s ending even with a first person pronoun subject:

'So,' **says I** to myself, 'that's their little game, is it?'

(訳) 非常にくれた英語では、say という動詞が過去を示すために単純現在時制で用いられるときは、1人称の代名詞が主語の場合でも-sがつくことがある。

「なるほど、それがあいつらの策略なんだな」と私は思った。

つまり、I said の意味を I says で表すことがあるということです。(ただし、says I という倒置した語順で使われることが多いようです)『カレッジクラウン英和辞典』には次のような用例が載っています。

says I わたしが言うには、わたしが言ったことだが (said I の俗な形): — “Peggotty,” **says I**, suddenly, “were you ever married?” わたしはだしぬけに言った、「ペゴティさん、あなたは結婚したことがあるのですか」

この表現はどのような場合に使われるのでしょうか？『英語基本動詞辞典』には「自分の言ったことを客体化して伝達するとき、くだけた会話では says I が伝達部として用いられることがある」とあります。決して大昔の英語とか、堅苦しい英語、というわけではなさそうですね。

そして、この表現を調べているうちに、次のような表現があることもわかりました。なんと say に-sがつくのは、1人称のIの場合だけではなく、目的格の me や、2人称の you が主語の場合にもあるようです！

Says me! (話) (Says who? にけんか腰で答えて) だってそうだろう (↓Says who?)

Says who? (話) (そんなことを言うなんて) 何様のつもりだい、何だって、まさか (↑Says me!; ↓Says you!)

Says you! (話) 君はそう言うがね (同意できない); そう言うのは

君くらいだ (7) 時に Says who? (↑) の返答として)

[ウィズダム英和辞典]

この中で、2つ目の Says who? は Who says that? から派生した表現だと考えれば、動詞 say の主語が三人称単数の who なので、says に -s がついているのがわかります。そして、残りの2つの表現の解説を並べて読んでみると、なんとなく you や me のときに says となる謎を解く手がかりになりそうです。つまり、1つ目の Says me!、3つ目の Says you! は、Says who? の返答として使われるという記述があるので、相手が言った Says who? というセリフの who の部分を me に、または目の前にいる you に置き換えて (says はそのままにして) Says me! とか Says you! という表現ができたのではないかと推測できます。つまり、

“Says who?” ➔ “Says me!”
➔ “Says you!”

というふうに、who の部分だけが入れ替わり、says の -s がそのまま残っているのではないかと推測できます。そしてこの対話の用例が『新英和中辞典』に載っています。

Says who? (口) だれがそんなことを言うんだ; まさか
⌘ Says who? — Says me! だれがそんなことを言うんだ—おれだよ

ちなみに、こういう表現は海外で発売された英英辞典に載っているのだろうかと思って調べたところ、Says who? は *Longman Advanced American Dictionary* に載っていました。また、says I や says you は学生時代に神保町の古本屋で買い求めた POD (*Pocket Oxford English Dictionary*) や COD (*Concise Oxford English Dictionary*) にちゃんと載っていました！ さすがです。

says he, says I (colloq., used in reporting conversation) [POD 6版]

says you (vulg. int.) I disagree [COD 6版]

これらの辞書ではいろいろな略号が使われています。上の、colloq は colloquial (口語的な)、vulg は vulgar (下品な)、int. は interjection (感嘆) を表しています。

本書の英文チェックをお願いした Christopher Barnard 先生にも確認したところ、ここでとりあげた表現は言葉遊びのような感覚で使われることが多く、現在でも使われるとのことでした。

